大　内　力

『帝国主義論』上・下

(『大内力経済学大系』第4～5巻)

東京大学出版会　1985. 8・9　vii＋277/278～542＋43ページ

大内力氏は宇野理論によるマルクス経済学の体系化を目指して『経済学大系』全8巻を単独で執筆し刊行中である。それは経済学方法論のほか原理論・段階論・現状分析の3分野を包含するが，ここで取り上げる第4～5巻『帝国主義論』上下は，重商主義・自由主義・帝国主義という資本主義発展の3段階を対象とした段階論の体系化の試みである。

上巻のはしがきで著者は，段階論は「資本主義の歴史的運動法則の解明」を課題とするが，宇野弘蔵『経済政策論』をはじめとする先行の業績では，原理論に比して「その理論体系としての完成度はかなり立ち遅れ」，「歴史過程の論理的整序が不十分」であって，それを克服するためには「対象を取り扱うための方法と分析のための概念規定」の整備が必要であるという(p. i)。

そこで序章では，段階論の課題と方法が主題となる。これによれば，原理論が純粋資本主義下の循環運動の法則性の解明を課題とするのに対して，段階論は生成・発展・変質という「資本主義の歴史的運動に現われる法則性の解明」を課題とする(p. 12)。そしてこの歴史的運動は，窮局的には生産力の発展とそれに伴う生産関係の変化を基礎としながら，国家権力等の経済外的要因に影響されて実現する。そこで段階論の方法としては，各段階ごとに「そのおのおのの社会的・経済的構造――基軸となる産業とその生産構造，支配的資本の蓄積様式＝労働力包摂の様式，基本的階級構造と国家権力の性格，代表的な経済政策と財政の構造，対外関係と世界市場の編成方式等――」の解明が必要となるが，こうした構造的段階規定と並んで，「ひとつの段階からつぎの段階への移行の歴史的必然性をも説くという方法」も必要であるとされる(p. 19)。この段階移行を重視するのが，宇野『経済政策論』とは異なる本書の特徴の1つであるが，さらに各段階で取り上げる典型国の選び方にも特徴がある。各段階の特質を検出するさい，多くの国の事例の共通項を抽出したのでは本質がぼかされるから，各段階を典型的に代表する国を取り上げ，その具体的史実に即して段階の特質と運動法則を解明することが必要である。そうした典型国として宇野氏は，重商主義・自由主義の両段階ではイギリス1国を，帝国主義段階ではドイツを中心にイギリス・アメリカをも副次的に取り上げたが，大内氏は，1国だけを典型国とする「単線型」は不十分だとして，各段階とも「積極的典型」と「消極的典型」の2国を取り上げ，両者の対比と相互作用の分析を含めた「複線型」の論理構成が必要であるという(p. 34)。こうすることで，積極的典型国の積極面や世界的連関が明らかになるだけでなく，自由主義段階から帝国主義段階への移行にさいして積極的典型国が逆転する論理も展開できるからである。その意味でこれは，さきに述べた段階移行論の重視と一定の関係をもつといえよう。

こうした課題と方法を踏まえて，前篇「帝国主義前史」では重商主義・自由主義の両段階が，下巻の後篇「帝国主義本史」では帝国主義段階が具体的に説かれる。しかしその内容に立ち入ることは，紙数の制約のため断念し，上記の方法に由来する若干の特徴をあげるにとどめることとしよう。

重商主義段階論の骨子は，封建制の崩壊，商品経済の進展につれて，重商主義政策にも支援された商人資本の活躍のもとに毛織物工業が発達し，他方で土地の囲い込みによる無産の労働者の創出と陶冶も進み，ここに産業資本が成立する条件が次第に整うことの説明である。そのさい著者は，つぎの段階に対応して，積極的典型国としてイギリスを，消極的典型国としてドイツを取り上げ，出発点での封建制の強弱，商業革命後の国際貿易のあり方などでの両国の差が，積極型・消極型の差につながった所以を強調する。

つぎに自由主義段階論では，イギリスに即して，産業革命が旧来の熟練の解体をつうじて資本のもとへの労働力の実質的包摂，つまり産業資本の確立を可能にし，そのもとで綿工業を基軸とする産業構造が展開して，純粋資本主義への接近を実現し，同時に政策面でも直接的な経済介入をやめる自由主義化が貫徹したことが説かれる。ここで著者が強調するのは，この発展が，同国を世界の工場とし相手国を農産物輸出国に位置づける国際貿易関係をつうじてはじめて実現したことである。そしてこの貿易関係は，相手国の商品経済化を促すにしても，ここでの産業資本はイギリスの競争に脅かされ，産業革命の自生的展開をまたずに既製の高度の技術体系を一挙に導入するほかなく，そのためドイツでみられたように，一方では資金集中のために株式会社制度の早期導入，他方では過剰人口の堆積と旧階級関係の残存，要するに産業

資本としての畸型性や自由主義化の不徹底が避けられなかった。産業資本のイギリスでの典型的発展は，後発諸国でのその畸型化を必至としたのである。

帝国主義段階論では，こうした関係に基づいて，さしあたり19世紀末大不況下での英独の地位逆転を説く。当時の製鋼革命による重工業化の進展は，固定資本の巨大化に対応しうる株式会社制度の普及を必要としたが，個人企業による産業資本の体制が根深く定着していたイギリスではその転換が遅れ，逆に畸型的展開をみたドイツがそれに即応し，新生産力の導入と生産関係の変容でリードをとることになった。そこでこのドイツを積極的典型国にとり，その重工業での株式会社制度に基づく資本の集中，独占体の形成，企業と銀行との関係強化，金融資本の本質(pp. 394–5)，これに基づく対外進出の強化，帝国主義政策の展開などの必然性が説かれる。それに対して消極的典型国イギリスでは，この転換が不徹底のため産業的停滞に陥り，過剰資本の輸出を拡大して外国市場・勢力圏の防衛・確保を図ったが，こうした両国間での勢力圏の再分割をめぐる対立が帝国主義戦争を必然化したことが示される。

こうした論旨が，本書では明快な論理と平易な文章で展開されている。そのうえ著者の研究蓄積の厚さを反映して，膨大な数の理論や実証の文献が参照され，随時適切な批判も加えられている。まさに段階論研究での1つの金字塔ともいえよう。しかし疑問もなくはない。個々の史実やその解釈は別として，方法論に関連して3つの論点を指摘したい。

第1点は，はしがきや序章で，段階論の課題が歴史的運動の「法則性の解明」にあり，「歴史過程の論理的整序」が必要だとされたのに，本論の展開は一見，英独資本主義発達史といった歴史過程そのものの叙述のような印象を与えることである。もちろん段階論が典型国の史実を素材とする以上，多かれ少なかれ歴史記述があるのは当然である。しかし歴史的運動の法則性が主題であれば，著者自身が段階論の方法としてあげた各段階の「社会的・経済的構造」へのその収斂が図られるべきであろう。つまり，各段階での史的展開がこの段階特有の再生産構造の形成にいかに帰結したか，そしてこの構造がいかなる蓄積様式を必然にしたか，という形で史的展開を構造論に総括することが必要であろう。むろん本書でそれが無視されているわけではないが，生産，金融，貿易，政策等々の各項目別に発展を追うだけで，相互関連をつけたそれらの総括を欠いたことが，発達史論的な色彩を強める結果となったといえよう。

第2点は，段階論での史的展開を上述のように位置づけるとした場合，著者が段階論の方法として強調する第2の段階移行論は，いかなる論理的位置を占めうるかである。ここでの問題は，典型国の転換を伴う自由主義段階から帝国主義段階への移行であり，この点では著者の積極・消極の両典型国からなる「複線型」の論理は，十分な説得力をもっている。しかしこの移行過程は，積極的典型国の交替を伴ったにせよ，それぞれの国にとって，新たな重工業的生産力に対応する金融資本の再生産構造の形成過程の一局面であって，それは自由主義段階の歴史過程がそうであるのと同様に，構造論に収斂するものとして位置づけられるのではなかろうか。いいかえれば，「複線型」の論理を生かせば，段階論の方法として著者の強調する第2の段階移行論は，第1の構造的段階規定論に吸収され，論理的整序が図れるのではなかろうか。

第3点は，重商主義段階論での消極的典型のもつ意味である。総じて消極的典型が意味をもちうるのは，積極的典型が生み出す構造と対比する場合であろう。しかし，重商主義段階では資本がいまだ自立できず，したがって独自の再生産構造も生み出せない。他の段階と異なってこの段階では，歴史過程は構造論に収斂しない単なる過程にとどまる。そうだとすれば，ここで消極的典型国を設定するのは，たんに他の段階との形式的整合性を保つためだけのように思われる。実質的にみても，イギリスを積極的典型国たらしめた要因としての封建制の弱さや国際貿易の拡大等は，あえてドイツを消極的典型国に採らなくても説けることであるし，また当時のドイツでの原始的蓄積の遅れは，自由主義段階論でこの国を取り上げるときにさしあたり説かざるをえないことであろう。段階論では経済史とは異なる手法が採られるべきであろう。

〔戸原四郎〕

[redacted]